

平成九年七月二十七日(日)

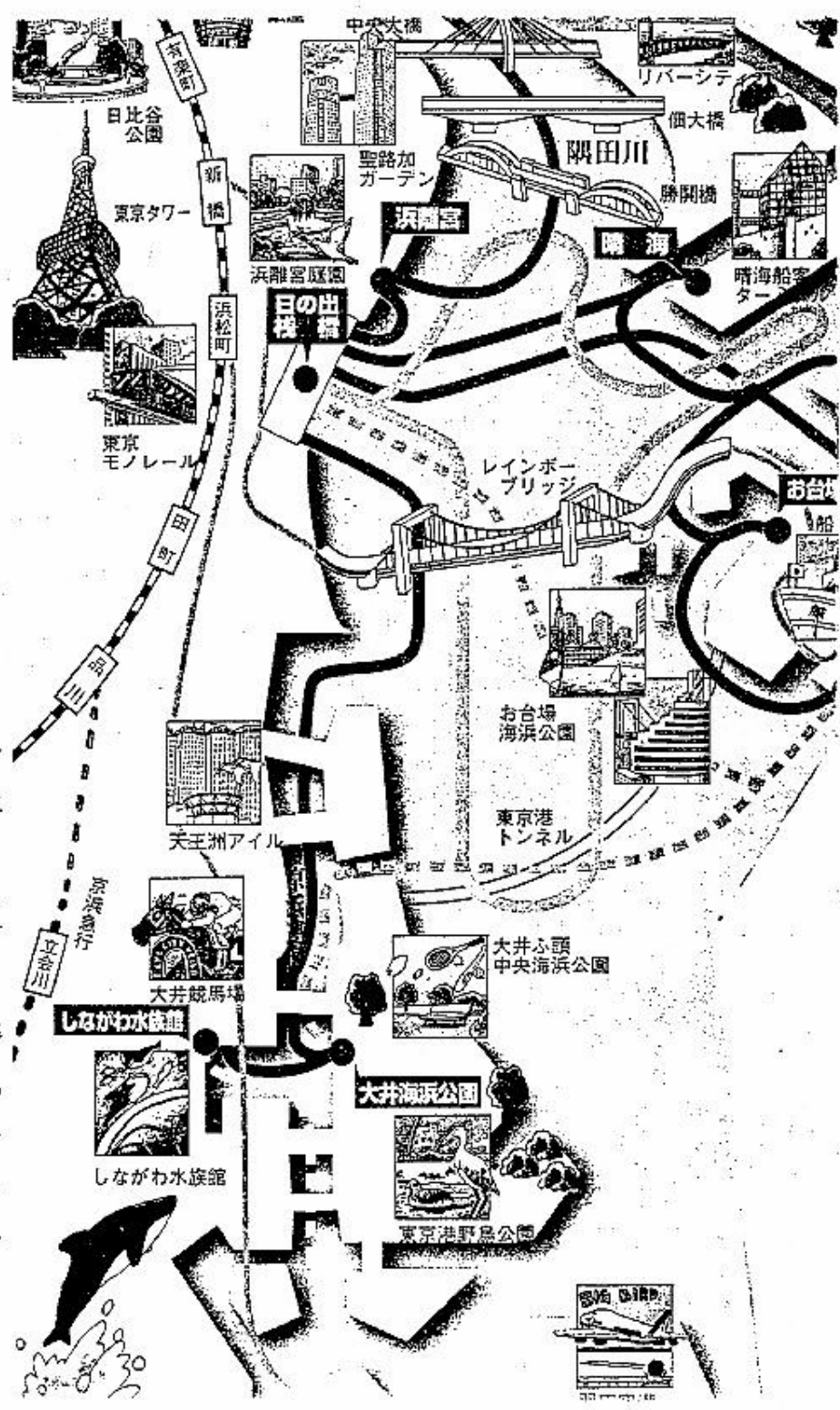
第二四三回 史跡めぐり 資料

ウォーターフロント 暑気払い

越谷市郷土研究会

ウォーターフロント暑気払い

今年の夏も元気ですごそう！





第243回 史跡めぐり

あたまの上を魚が泳ぐ、ウォーターフロントでの暑気払い

- 日時 平成9年7月27日(日)
 集合 午前8時 東武線・越谷駅東口前
 コース 越谷駅＝東銀座駅＝大森海岸駅…巖井神社…しながわ水族館＝(東京都観光汽船)＝日の出棧橋…日の出駅＝(ゆりかもめ)＝新橋駅＝銀座駅＝築地駅…聖ルカタワー展望室…明石町資料館…築地駅＝越谷駅 <解散>

- 案内者 幹事・宮川 進
 参加費 4,000円(交通費・入場料など)
 食事 各自持参(雑炊に鯉前・カレー、サンドイッチ 880円)

しきないしや 式内社「延喜式」卷九・卷十の、いわゆる「神名帳」(神名式)に登錄されている神社のこと。詳しくは延喜式内社というが、一般に式内の社(しきないのやしろ)・式内社、略して式内・式社という。また、「神名帳」に登錄されない神社を式外の社(しきげのやしろ)・式外社(しきげしや)と略して式外という。「神名帳」の冒頭に「天神地祇惣三十一百册二座、社二千八百六十一処、前二百七十一座、大四百九十二座、三百四座並預祈年國幣二、小二千六百册座、四百卅三座並預祈年國幣二」とあるように、全國五畿七道に散在する天神地祇、すべて三一二二座を發載してある。上記で、「座」とは神座の意で、一社に二座以上の祭神を祀る場合もあるが、一座の場合には社名だけを記してある。「処(所)」は社の所在数を示し、たとえば諏訪大社のように一社で上社・下社と二社ある場合は、一社二所という。次に、「前(まえ)」とは、祭神が二座以上のとときに、主座のほかをすべて「前」という。また、「大」は大社、「小」は小社の意で、これらは神祇官の祭る官幣社と司司の祭る國幣社とに分かれる。奈良時代ではすべて神祇官より官幣が奉られる規定であったが、平安時代初期の延暦十七年(七九八)以後は國幣も行われるようになり(類聚國史)、官幣社・國幣社ともに官社と称した。大社は四九二座(社数五三三所)あり、うち官幣大社が三〇四座(社数一九八所)、國幣大社が一八八座(社数一五五所)ある。小社は二六四〇座(社数二五〇八所)で、うち官幣小社が四三三座(社数三七五所)、國幣小社が二一〇七座(社数二一三三所)あり、式内社の三分の二以上を占めている。官・國幣社とも名神祭に預かるのは大社

式内社分布一覽

	官幣大社	官幣小社	國幣大社	國幣小社	合計
宮中	30	5			36
京	3				3
東	231	427			658
北	19		33	679	731
山	5		37	340	382
陽	1		13	338	352
道	1		36	323	560
道	4		12	124	140
道	10		19	134	163
道			35	69	107
合 計	304	433	188	2207	3132

で、これを名神大社と称し、すべて三〇六座(社数二四四所)あり、そのうち官幣の名神大社が二七七座(社数七七所)、國幣が一七九座(二四七所)ある。官幣大社はいずれも案上の官幣に預かる。名神祭に預かる官幣大社で祈年・月次・相嘗・祈宵に預かるものは五五座(社数三二所)、祈年・月次・新嘗に預かるものは七二座(社数四六所)ある。官幣大社で名神祭に預からないが、祈年・月次・相嘗・新

嘗に預かるものは一六座(社数一〇所)、祈年・月次・新嘗に預かるものは一六一座(社数一一一所)ある。官幣大社は五畿内を主として諸道に散在するが、西海道には所在しない。官幣小社は祈年祭に案下の官幣を受け、五畿内に限られて所在する。國幣社は大・小社とも畿外に所在し、祈年祭の國幣に預かる。その品目や数は法格に応じて相違がある。「神名帳」上・九には宮中・京中・五畿内・東海道の

武蔵國式内社一覽

以下のとおり、43の神社がのせられている。

① 長幡部神社	⑩ 高負比古社	⑳ オマトツノ神社
② 稲実池上社	⑪ 伊波比神社	㉑ 虎柏神社
③ 稲実荒御魂神社	⑫ 横見神社	㉒ 布夏天神社
④ 今城青八坂稲実神社	⑬ 玉津神社及官目神社	㉓ 穴沢天神社
⑤ 金佐奈神社	⑭ 前五神社	㉔ 杉山神社
⑥ ミ力神社	⑮ シケヒメ神社	㉕ 足立神社
⑦ 稲乃売神社	⑯ 椋神社	㉖ 調神社
⑧ 榎山神社	㉑ 秋父神社	㉗ 磐井神社
⑨ 小被神社	㉒ 青渭神社	㉘ 禰田神社
⑩ 白カミ神社	㉓ 阿佐留神社	㉙ 永川神社
⑪ 奈良神社	㉔ 広瀬神社	④① 中氷川神社
⑫ 田中神社	㉕ 阿豆佐味神社	
⑬ 出雲乃伊波比神社	㉖ 出雲イハヒ神社	④②
⑭ 伊古乃逆御玉比売神社	㉗ 物部天神社及逆御玉比売神社	④③
⑮ 高城神社	㉘ 小野神社	④④

諸社を、同下(卷十)には東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道の諸社を發載してある。なお、式内社と推定されるものが二社以上存在し、いずれか決定しがたい場合、それらを論社という。

式内磐井神社のこと

不入斗村

式内社磐井神社の所在地は、すでに述べたように、大田区入新井町である。この入新井町というのは、明治になってから不入斗村とその隣村の新井宿村とが合併して、入新井村となり、さらに町となったのである。であるから、当社の所在地は、以前は荏原郡不入斗村と称した。

祭祀の対象

つぎに、当社における祭祀の対象について、考えてみよう。

『新編武蔵風土記稿』によると、「祭神、正面は応神天皇、左は大己貴命、仲哀天皇、右は神功皇后、姫大神なり」とある。また『江戸名所図会』では、「祭神、中殿応神天皇、左殿仲哀天皇、右殿神功皇后」と記してある。いずれも応神天皇を主神としているが、同天皇ならびに仲哀天皇、神功皇后の三神は、八幡社としての祭神であることは、釋田神社の場合と同様である。これらを除くと、『風土記稿』によれば、大己貴命と姫大神とが祭神として残るが、これらも磐井神社創建当時の祭神とは考えにくい。

鈴石という靈石

すでに述べたように、当社には社宝として、鈴石という靈石が昔から蔵せられている。社伝によると、つぎのとおり伝えている。

「神功皇后韓国を征したまひし時、長門国豊浦津海辺にて得たまひし含珠がんしゆの靈石あり、色青くして形状卵の如く、石中に鈴の音あり、これをならせば鏗々しやうたり、故に鈴石と名づく。皇后やがて之を香椎宮に収めたまひぬ。欽明天皇の御宇八幡大神宇佐宮に鎮座の時、この石をも同じく宇佐宮に移されけり。聖武天皇の御宇、石川朝臣年足あそんを奉幣使として宇佐へ上されし時、不測の告ありて件の靈石を授けられしよりこのかたその子孫に伝へたるを、年足の嫡孫中納言豊人、延暦年中当国の任にあたりて下向ありし頃、神勅によりて当社へかの靈石を奉納せり」この伝説は、やはり八幡社勅旨に結びつけられていることが明瞭である。

今から十数年前、私は故森田宮の案内で、神庫に蔵せられたその靈石を拝観する機会を得た。長さ七五センチ、幅は広いところで三〇センチほどの楕円形の石で、色は青黒い。私も、他の石でこれをたたいてみたが、その中に空洞でもあるかのような響がした。その目方は、六〇キログラムほどあるという、相当の大きな石である。

しかるに山崎闇齋の『遠遊紀行』に、つぎのような記事がある。

「明曆四年此の社にもと一石あり。之を転ずれば則ちその声鈴の如し。近人偷みて之を去る」すなわち明曆四年といえ、今から三百年ほど前に、この鈴石は何人かによって盗みさられたことがあったわけだ。今の鈴石は、以前のものが再び帰り来たったものか、それとも別の新しい石が代わりに持ちこまれたものかはわからない。しかし六〇キロもある石を盗み出すということは、容易なことではないし、それに闇齋の記すところによれば、以前の石はころぼすことが簡単にできたようだから、おそらく今の大きな石は以前の石とは別のもので、以前の石はもっと小さくて、ほんとに鈴のような音がしたのではなかるうか。

かつてはこの鈴石が、磐井神社の神体であったかもしれない。しかし私には、当社創建当時からこの靈石を祀ったものとは考えられない。

磐井が祭祀の対象か

私は、当社の最初の祭祀の対象は、その社名の由来するところの「磐井」にあったのではないかと考えている。すなわち、岩の間に湧出する泉井があつて、それを近くの人々や往来の人たちが尊重し、有難しと思ひ、これを神聖なものとして祀るようになったのが、当社の起原ではないかと思う。

当社の磐井については、『総国風土記』武蔵国残篇に、左のごとき記事がある。

「社辺に磐井あり。事を祀る、土俗妄願あれば則ち御手洗の水塩味に變ず。事正直ならば清水の如し。近国之を奇とし、之を祀る。病者之を取り、之を服せば、その功驗神の如し。土俗藥水と曰う」

磐井神社の烏石

海辺国家といつていい日本には、各地に海から打ちあげられた木石に神が宿つていてという信仰があり、東京湾沿岸でも各浦でご神体として仰がれ祀られている。京

浜急行新馬場駅に近い東京都品川区東品川一丁目の寄木

神社に継承されている伝説もこの一種である。昔、日本

けるのみこと 武尊が弟 わたらばなひの 橘姫をともなつて、

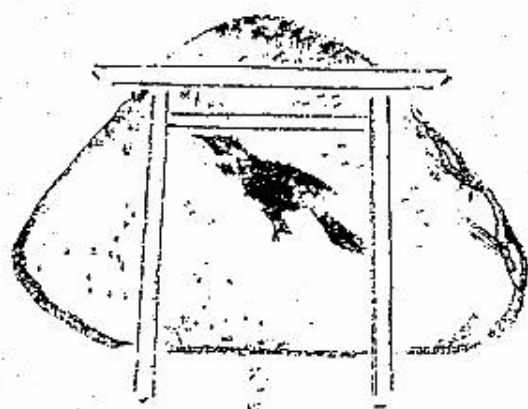
東征した道中でのことである。相模国から上総国へ向かうた

め、走り水の海を船で渡ろうとしたところ、海神の怒りを受けて乗った船が転覆してしまった。

船体はバラバラになって各地の浦に漂い着いたというが、姫の御衣の紐と船材の一部が品川の浜に流れ寄つたので、拾った漁師がこれを姫の霊を祀るご神体にして寄木明神の祠を造つた。

ところが寄木明神の霊力は偉大でたちまち一浦が豊かになり、周辺の漁師たちからも信仰されるようになったという。

同じ京浜急行の大森海岸駅からすぐの所に磐井神社（鈴ヶ森神社）があり、ここには海中から出現した烏石がある。このことを知つたのは、昭和四十七年の春に仁科又亮氏が発見した「広



烏石

重武相名所旅絵日記』を、NHKテレビの朝の報道番組で私が紹介・評価した時に始まる。その後の昭和五十一年に鹿島出版会から一冊の本にもなり、これには広重が描いた「鳥石 海中出現 鈴ヶ森八幡宮境内小祠の中に有」「大サ四尺半」と記した鳥石を、吉田漱氏が探索した結果も収録されている。

この磐井神社は早くから武州八幡の惣社といわれた古社で、神功皇后が長門國で得られたと伝える鈴石もある。私は鳥石を拝見する機会がもてなかったので、吉田氏の「伝説の石は守り神」という実査記をかわりに引用させていただく。「神社でいただいた由来記には書いてなかったが境内に、太田区文化財をしめす標示があり、画人松下鳥石が寄進したと記してある。画人の号との関連はとにかく、その石を実見してみると、表面の一部にすこし盛り上がって、鳥の形をした黒っぽい模様があらわれていた。鳥石は現在、社務所内に安置されているが、以前は境内の弁天社の傍にあったという。戦時中、いちはやくこれと神室の鈴石は土蔵に入れたので損傷もなかった。広重のスケッチのままに、石の前には小さな鳥居もある。この小さな鳥居も広重が見た当時のものというのはうれしいことであつた」とあり、海中出現の潭着信仰のあつたことが想像されるのである。

なお鮫洲観音と呼ばれる本尊のある海晏寺が、京浜急行の鮫洲駅と青物横丁駅の中間の第一京浜国道をこした地にある。実は鮫洲観音も海中出現といつていい鮫の腹から発見されたもので、北条時頼が関与し本尊にして海岸に堂を建てたのが海晏寺の由来だという。

東京湾埋め立ての歴史

2 埋立ての始まり (江戸時代)

最初の埋立ては現在の日比谷公園、丸の内、皇居前広場のあたりが入江(日比谷入江)であったところを、徳川家康が埋め立てたのがはじまりである。当時の江戸は『岩淵夜話別集』にあるように、城の東方の平地はいたるところ潮入りのアシ原であり、町人や武士の屋敷として割り付けるべき土地が10町もなく、西方の台地は一面の荳原がどこまでも武蔵野に続いているという有様であった。

海岸の地形は図30のように城の南東に日比谷入江、江戸前島、江戸漆、洲、隅田川、湊池と続いていた。家康は、江戸漆の奥の日本橋を交通の拠点にし、江戸漆を経済活動の中心とし、日比谷入江を軍港として位置づけたが、経済活動の国際化にともない、江戸城が外国の船から砲撃される危険を除くという江戸城の防備の観点からと、大名、旗本など武家家敷の需要にこたえるため、前述の日比谷入江を埋め立てたものである。

その後、江戸漆も築地、鉄砲洲、盤敷島などの埋立てがすすみ、河岸(運河=水路と物揚場)が網の目のように発達し、江戸の台所を支える内港としての江戸漆ができあがった。この時代に形成された水路のいくつかは東京オリンピック準備のための高速道路建設で埋められたり、高架道路でフタをかけられたりするまでは、河岸としての機能は久しい昔になくなったとは言え、ほぼ300年前の形をとどめていた。

一方、隅田川の東部である現在のいわゆる江東三角(デルタ)地帯はどうであったかと言えば、江戸の初期の海岸線はほぼ小名木川にあった。この小名木川は塩を行徳から江戸まで運ぶ輸送路として家康が建設したものであったが、当時の海岸線の確定工事としての性格ももっていた。以後、江戸市街地の拡大とともに永代島を皮切りに、次々と埋立てがすすんだ。埋立てには主に江戸から発生するゴミがあてられ、1700年代前半に江戸の塵芥処分を請け負った秋田利右衛門がその子孫とともに埋め立てた土地は38万坪(125ha)にも及ぶものである。これらの埋立地は、農耕地となり「平井新田」などとよばれたが、やがて市街地化し、江戸末期までには、江東方面の海岸線は現在の地下鉄東西線のあたりにまで南下したのである。

このように江戸時代は江戸城を中心とする都市の形成と発達が埋立ての要因であった。

3 近代の東京湾と埋立て（明治、大正、昭和20年まで）

この時代は江戸が東京と改称され近代国家の首都となる一方、横浜は国際貿易港としての位置を占める時期であり、両都市の発達とともに埋立ては東京湾の西側一帯に拡大する。

東京港の隅田川^{すみがは}滞筋は江戸時代よりほとんど自然の状態のまま航路泊地に利用されていたが、土砂の堆積による河床の昇がはなはだしく、小型船舶の入港にも支障をきたしたので、東京府は浚渫を行なった。この大量の浚渫土砂を処分し、あわせて港湾施設用地や市街地用地を確保するため埋立てが行なわれ、月島、芝浦、江東区深川方面などが形成された。

横浜港は江戸末期には戸数わずか100戸余りの一漁村にすぎなかったが、黒船の来航以来外国の開港圧力は強まり、安政元年（1854年）に江戸幕府は急きよこの地を開港した。貿易の発展にともない横浜港は近代港としての棧橋、臨港鉄道などの諸施設をととのえ商業港としての形をととのえてゆくが、天然の良港である横浜は水深も十分あり、したがって海底の土砂をさらう必要もなく、港の発展の度合にくらべて、埋立てはそれほどでもなかったと言える。

これにたいして、鶴見から神奈川にいたる海岸は、日本の産業資本の台頭による重化学工業の基地として、1913年から15年間に、175万坪（578ha）が埋め立てられた。ここに京浜工業地帯の基盤が形成されたのである。

しながわ水族館…しながわ区民公園の中に、地上1階地下1階の大型水族館が誕生。品川区に流れる目黒川、立会川を再現したフライングゲージや、15^{メートル}もの海中トンネルなど充実した構成。レストランや売店を中心にしたレストランハウスも完備された。昔宿場町として栄えた品川が“水”との係わりが強かったことから、遊びながら学習し、追体験ができる“遊体験”の場だ。10時～17時、入館料 800円、火曜休（祝日の場合翌日休）。

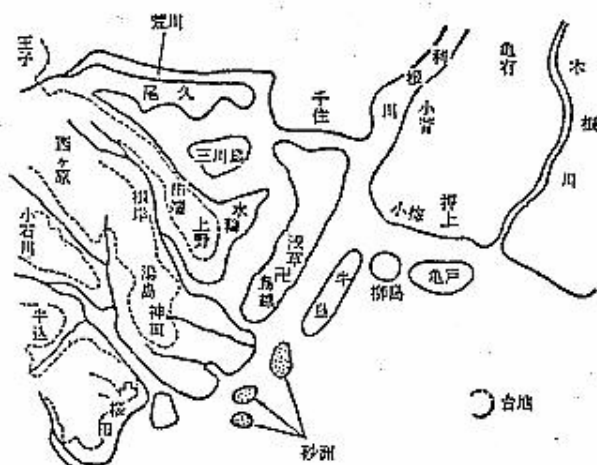
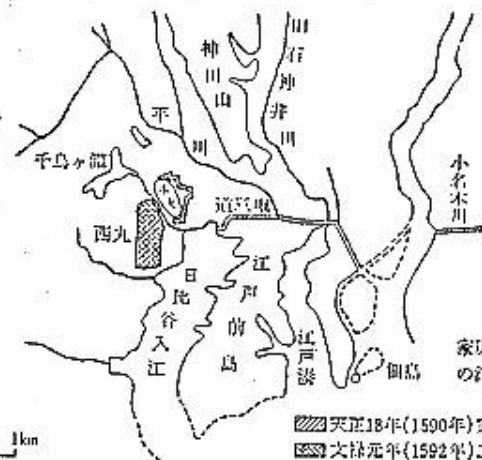


図2 鎌倉時代の江戸想像図 (地名は後世のものをもくむ)
 (日本地理風俗大系, 第3巻, 20ページ, 誠文堂新光社, 1960年)



家康入国の際の江戸

天正18年(1590年)家康入国当時工事
 文禄元年(1592年)工事



昭和 (戦前). 1925—1945年.



昭和 (戦後). 1946—1965年.



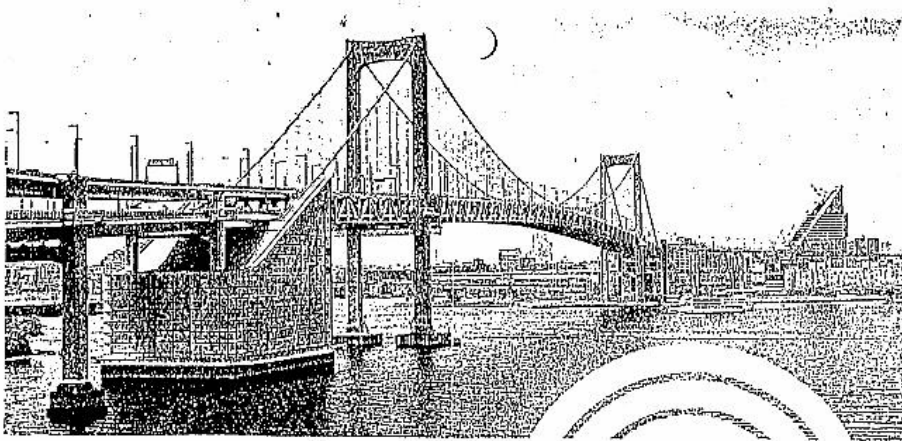
1966年—現在

品川台場
 ▼港区芝浦沖、品川区東品川
 品川台場汽船(東京港内運航)
 勝間橋(元)品川台場下船

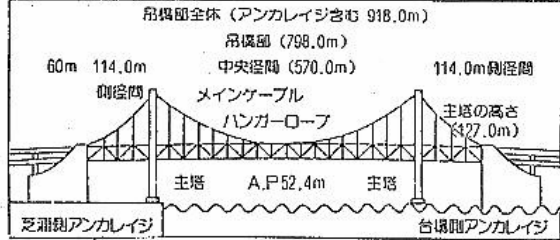
品川台場は、一八五三(嘉永六)年六月米使ペリー来航を機に、伊豆窪山(いずくぼやま)の代官江川太郎左衛門英竜(えいりゅう)の意見により、幕府が江戸湾防備のため同年八月からいそぎ築造に着手して築いた砲台だ。老中阿部正弘らの指揮のもと、品川沖に一ヵ所の砲台を築く計画で工事がはじまり、芝高輪泉音寺台地・品川御殿山などをほりくずして土をこび、五角形または六角形の砲台を築造した。品川海岸寄りから沖にむかって第一・二・三とならび、その内側(江戸湾の内側)におなじく沖へ第四・五・六・七番と配置される予定だったが、第四番と七番は未完成で、第八番以下は未着手におわった。

ペリーは翌年正月、江戸湾に再来して小柴沖(こしばしお)にすすみ、三月に日米和親条約(神奈川条約)が調印された。

御台場工事は幕府の財政事情により同年五月に中止され、第一・二・三・五・六番の五基だけが完成した。そのうち、第一と第五は品川埠頭埋立地にはいつてしまい、いまは第三と第六(圃史跡)だけが残っている(芝浦沖、水上公園)。亀甲形の築島で、周囲に高さ一〇メートルの石塁をつみ、内部はスリパチ形にくぼんで、陣屋・砲台・火薬庫・炊事場などがおかれていた。



レインボーブリッジ



アンカレイジは、レインボーブリッジのケーブルを固定する施設で、芝浦側とお台場側に一カ所づつあります。橋全体が曲線強調したデザインになっているのと対象的に、鋭角的なデザインとして三角形をモチーフとした建物です。ここは展望室・遊歩道への入口で、両側にある総ガラス張りのエレベーターで連絡しています。

築地明石町

外人居留地のたたずまいをいまに。

周辺の様子▼

築地から隅田川方向へ歩けば、ほどなく明石町である。休日の閑散とした道のかなたに聖路加国際病院の古典的な建物が見えてくる。病院手前の角に、まず目につくのは、芥川龍之助誕生の地という解説板と、やや離れて浅野内匠頭邸跡碑とがある。

説明によれば、明治のころは、このあたりに牧場があつて、龍之介の生家も耕牧舎という牧場で、牛を飼い、牛乳をしぼって売るのを商いとしていたという。

江戸のころは、この付近一帯を鉄砲洲と呼んでいた。忠臣蔵で有名な、浅野内匠頭の鉄砲屋敷もこのあたりにあつたという。いま内匠頭と四十七士をまつる高輪泉岳寺の墓地入口に屋敷の門があり、浅野家鉄砲屋敷から移築されたと説明がある。

さて、築地といえば聖路加病院が有名だが、もう古典的ともいえる、塔上にある十字架は変わらず、戦後駐留軍に接収されていたころの、妙に明るい雰囲気ともまた違った、築地らしいたたずまいである。

この病院とその周辺一帯はまた、豊前中津藩中屋敷跡でもあつた。豊前中津藩といえば、福沢諭吉が藩士であつたことで名高い。聖路加病院前を通り過ぎると、休日の静かな街の中に、「蘭学事始」の地碑と、「慶応義塾開塾の碑」があつて、中津藩、福沢諭吉、蘭学、慶応義塾、という点と線がつながる。ちなみにこの碑は、手入れもよく美しく、なかなか立派なもので、立ち止まってよく読むと、幕末から明治への時代の流れを彷彿とさせる。

福沢諭吉は、ここ中津藩中屋敷内に、藩の命によって、蘭学塾を開き、それが現在の慶応義塾大学の祖となつた。しかし、ほどなくこの地が外人居留地になるということも立ち



蘭学塾

オランダ語による学問を

学んだ話。

前沢良沢 杉田玄白
オランダ医学を学び、「辭
体新書」を著す。

鍋木清方

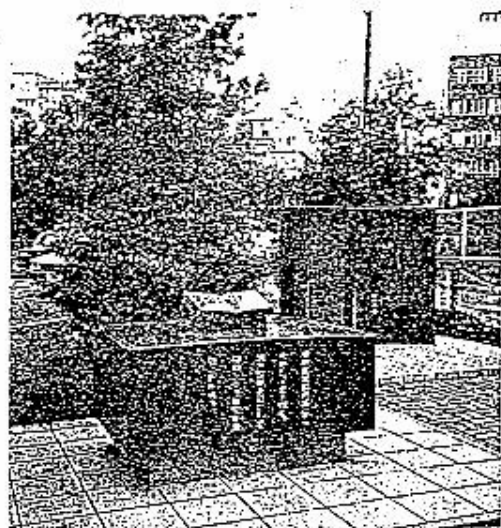
明治から昭和期の日本画
家。

ハイカラ

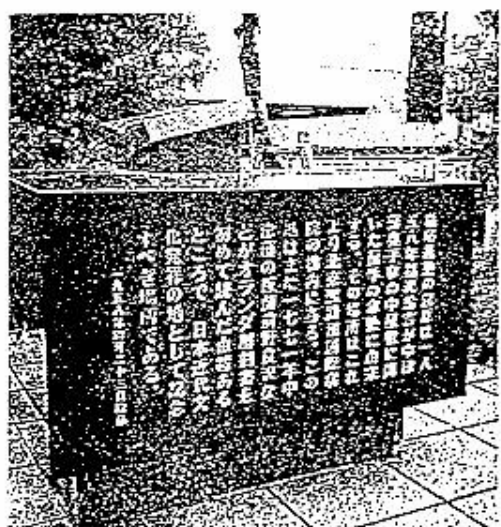
欧米風で目新しい様子。

モールス電信

アメリカ人モールスの考
案によるもので、トン、
ツの音による符号で通
信し、文字になおすもの。



蘭学事始の碑。ここにあった中津藩の屋敷
内で、藩士福沢諭吉は蘭学塾を開いた。



慶応義塾大学発祥の碑。ここが外人居留地
になるため芝に移転し、慶応義塾とした。

のきとなり、慶応四年四月芝に移転し、慶応義塾と改称、その後三田の現在地に落ち着いた。

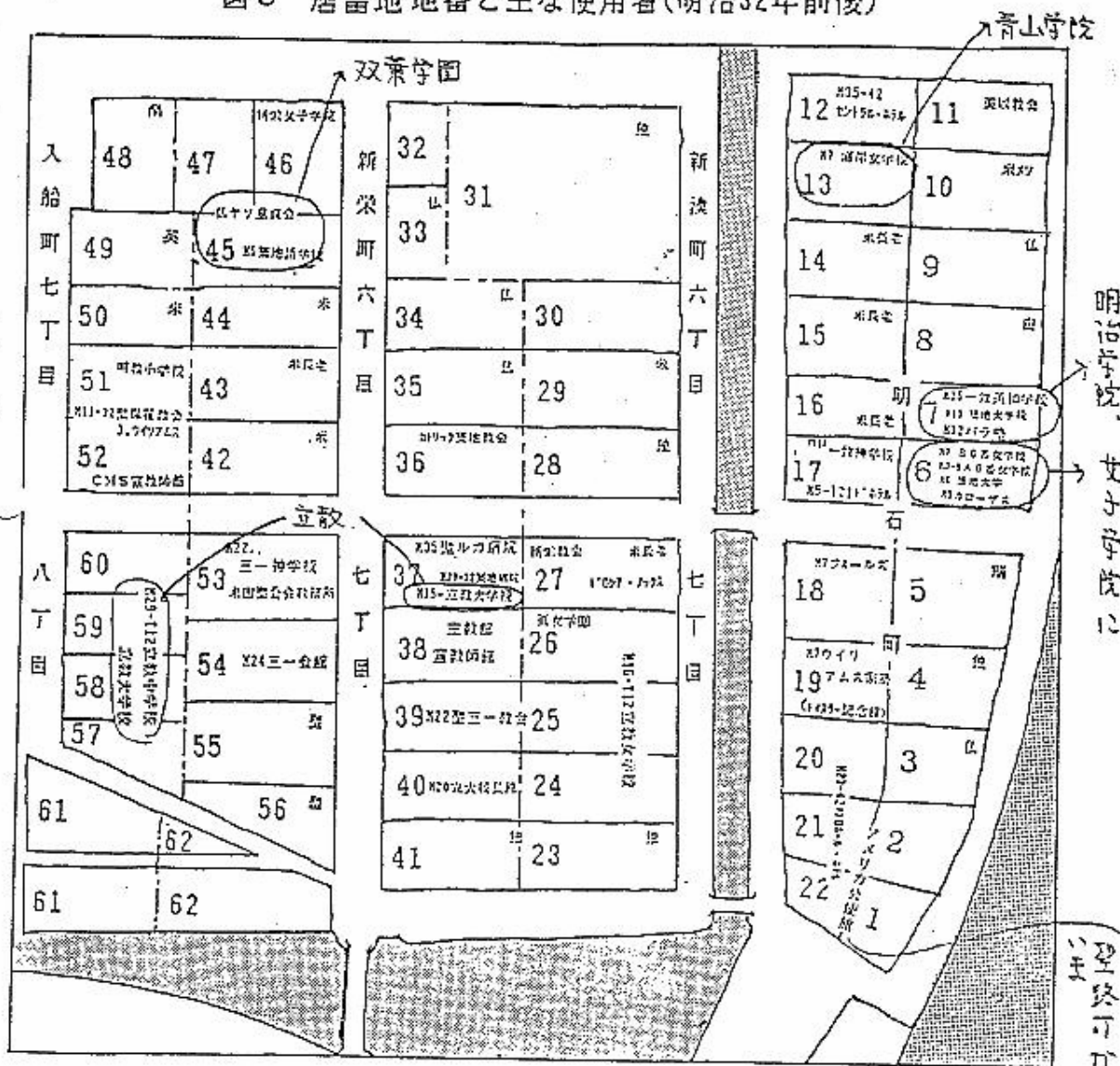
ここに蘭学塾があった当時は、藩医前沢良沢のもとに、杉田玄白、中川淳庵等が集まり
オランダ語の解剖学の書を識訳するのに、日夜苦心したという。

この碑の光を隅田川寄りに行くと、築地外人居留地跡、「アメリカ公使館跡」があり、幕
末一気に外国からの風が日本を席巻した様子がしのばれる。現在の築地明石町に、その面
影を見ることはできないが、鍋木清方描く「築地明石町」の情緒と、居留地のハイカラの
混在する、雰囲気のある街であったのだろうか。

また、「居留地跡」の近くに、「指紋研究発祥の地」がある。指紋研究とは何事かとい
うと、当時宣教師として来日した英国人医師が、捺印を押してハンコの代りとする日本人の
習慣に興味をもち、科学的な指紋研究をこの地で始めたとのことである。

さらに、明石町から南寄りの築地六丁目には、「電信創業の地碑」がある。外人居留地を
管理する東京運上所と、横浜裁判所との間でモールス電信を開始した記念の地碑である。

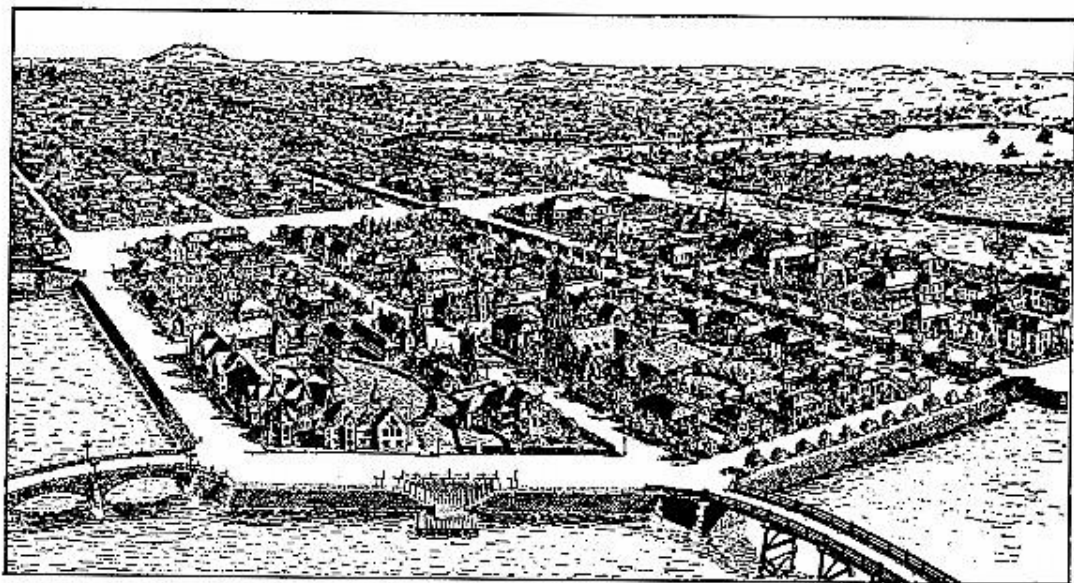
図8 居留地地番と主な使用者(明治32年前後)



聖公会は、居留地の競貸しには初め消極的で、開始以来十年目に初めて参加、二六、三七、三八の三区を手に入れた。居留地は仮に大きく四つに区分すると、西南部を聖公会が占め、北東地区にプロテスタント、北西部地区にカトリックが入った格好になった。新栄女学校(女子学院の前身)は早くに他に移り、海岸女学校(青山女学院の前身)は明治二十七年の大震災の後青山へ移った。一致英和学校と一致神学校は明治一九年合同して芝白金に明治学院を、カトリックの築地語学校は明治四二年麴町に移り双葉学園となった。

立教中学校、立教女学院は関東大震災に会い、池袋と久我山へ移った。後には唯一つ聖路加病院が留まって発展してきた。

文明開化120年 築地居留地展



TOKYO, THE FOREIGN CONCESSION, AND THE CHURCH'S MISSION PROPERTY.

141 東京のなかの外国 築地居留地 (米国聖公会雑誌 スピリット・オブ・ミッションズ 1894・3)

「築地居留地」明石町資料室

東京都中央区明石町14-2 明石町区民館内 電話03(3546)3900

明治3年、東京開市を機に外国人の住む町として築地居留地が開設されました。その結果この土地に近代日本の文明開化の種がまかれ、育ち、その苗が各地に移されて、多くの人材を産み、文明・文化それぞれに大きな発展を遂げ、現代日本の基礎づくりに大きな役割を果たしてきました。

その歴史と資料はそれぞれの分野に保存されてきましたが、個々に分かれたままで、文明開化の源泉となった「居留地」としての鳥瞰的総合的な資料のまとまりは残念ながら欠如したままです。

居留地が開設されて時あたかも120年、またその廃止からもすでに90年近くたち、このままでは資料の散逸がさらに激しくなることを憂い、また資料収集の一拠点が生まれることによって情報の集まりが加速されることを願って、この記念すべき年明石町に資料室として小さいながら産声をあげることになり、本展を開催しました。

本展の開催にあたり、貴重な資料のご提供ならびにご助言を賜りました皆様に厚く御礼申し上げます。

併せて、ご観覧の皆様のご意見・資料のご提供により、この資料室が年々充実し、より正確なものになっていくことを心から願っています。

中央区明石町町会

1. 海の中から現れた町
2. 火と土が産んだ町
3. 町屋と武家屋敷の町
4. 黒船来航
5. 横浜開港・江戸開市
6. 幕末から明治へ
7. 異人館の町
 - I 外交官の町
 - II 宗教の町
 - III 教育の町
 - IV 西欧型生活文化の町
8. 居留地時代の終り

家康入府の頃、この町はまだ江戸湾の海の底でした。明暦3年のいわゆる振り袖火事の焦土で埋立てられ、この町が生まれてから約300年になります。江戸時代は武家領が主で、忠臣蔵の浅野家もここにあり、慶応義塾も中津藩奥平邸内に誕生しました。安政条約で江戸の開市が決まり、海と堀に囲まれたこの地を居留地と定めた幕府の意図は、明治政府に引き継がれ、実施に移されたのが明治3年です。この後、条約改正で居留地が解消するまでの30年間に、居留地は近代日本の文明開化に大きな役割を果たしました。明石町にその後も残されていた異人館の町並は、大正12年の関東大震災でついにその面影を失い、多くの記念碑が歴史を物語っています。

明石町とその周辺には、文明開化の様々な種がまかれ、華ひらきました。

- 居留地時代明石町にあった外国公使館は10ヶ国・領事館も10ヶ国
米国公使館跡の当時の記念石には、州を現す星が13しかない。
- 著名なミッションスクールの多くがここから巣立っていった。明治学院・立教大学・青山学院・関東学院・雙葉学園・暁星学園・女子聖学院・女子学院・立教女学院そして隣接地には工学院大学…とそれぞれの前身がここに生まれている。
- これに先立つ幕末には、この地にあった中津藩奥平邸内で慶応義塾が発足、福沢諭吉が英学を講じ、のちの慶応義塾大学の基礎を作った。
- 同じ邸内で1774年、オランダの解剖書ターヘル・アナトミアの翻訳「解体新書」が杉田玄白・前野良沢・中川淳庵の手で完成。西洋学術書最初の翻訳である。
- 明石町にあった江戸長崎会所に集められた五ヶ国語の学術書17280冊は、のちに東大図書館の核となった。
- 明治2年、日本で初めて東京横浜間に電信が開設された。
- ローマ字のヘボン博士はのちに初代総理になる明治学院の前身東京一致英和学校で教鞭をとっている。(女優 キャサリン ヘップバーンは博士の一族といわれる)
- ヘボン博士の英和辞典製作をてつだった岸田吟香(画家 劉生の父)は、博士の指導で日本最初の目録を作り販売した。
- 明石町に住んだ宣教師ヘンリーフォールズは、日本人の拇印から指紋が個人の識別に役立つことを発見し、学会にその研究を発表した。
- 長崎経由で築地に運んだオランダの印刷機をもとに、平野富二(石川島重工の祖)が日本の印刷文化の源泉を作った。平野は先輩、本木昌造が導入した明朝体活字を改良して「築地型」明朝体をつくり、その後の日本の活字を方向づけた。
- ジョン ブラックは横浜に続き、居留地内で「日真新事誌」を発行、東京での新聞の先駆けとなった。息子は落語家となり日本に帰化した。
- 西洋軒ホテル(のちの精養軒)の初代グランシェフとなったチャリヘスは隣接する入船でチャリ舎をおとし、東京最初のパンをやいた。
- 明治3年、西村勝三は大村益次郎・渋沢栄一のバックアップで、日本最初の靴工房を入船に作った。日本で最初につくられた靴は軍靴であった
- 芥川竜之介の実家は居留地の一角で牧場を営み牛乳を作った。居留地内に日本人が住んだ数少ない例で、この土地は昔の浅野内匠頭邸跡の一部である。
- 若き日の谷崎潤一郎は英語を学ぶため、東大で英文学を教えたサンマー教授の夫人の欧文正鶴学館に一年間通った。
- オーストリー公使館の書記官であったクーデソンホーフ伯爵は31番に住み、青山ミツコと結婚。次男リハルトは欧州共同体の提唱者となった。
- 浮世絵に魅せられ来日し、風刺画とイラストで当時の日本を海外に伝えたジョルジュ ビゴーは、佐野マスと結婚し、入船に住んだ。
- アメリカの宣教師ウィリアムズは、立教学院や日本聖公会を創立し、後にトイスマーを呼んで、聖路加国際病院を完成した。

参考資料

- 東京湾学への窓 -東京湾の原風景- 高橋在久著 96.2 蒼洋社刊
 - 東京湾 日本科学者会議編 79.12 大月書店刊
 - 築地明石町今昔 北川千秋著 86.10 聖路加国際病院礼拝堂委員会刊
 - 武蔵の古社 菱沼 勇著 47.3 有峰書房刊
 - 国史大辞典 60.11 吉川弘文館刊
 - 東海道を歩く -東の史跡案内- 横山吉男著 H2.11 東京新聞出版局刊
 - 東京ベイエリア -ブルーガイドパック40- 96.5 実業之日本社刊
-

越谷市・建長板碑から750年

記念講演会・開催 /

北鎌倉の建長寺と同じ時代に建てられた越谷市・御殿町の建長板碑が、あと2年で750年をむかえます。(1249年建立)

この板碑は県内でも指折りの古い板碑の一つであり、越谷市で最大、最古のものです。中世の越谷を物語る貴重な記念物です。

越谷市教育委員会と越谷市郷土研究会では、建長板碑の750年を前に、「中世の越谷」を予習しておこうと、次のとおり記念講演会を開催いたします。「板碑とは何か」から、建長板碑の意味まで、やさしく、詳しいお話がきけます。会員の方々のご参加をお願いいたします。

「中世からのメッセージ」

-越谷市・建長板碑から750年-

講師 諸岡 勝 先生

(埼玉県平和資料館)

日時 8月24日(日) 午後1時30分より

場所 越谷市中央市民会館(越谷市役所前) 5階会議室

費用 資料代 500円

主催 越谷市郷土研究会

共催 越谷市教育委員会

後援 越谷市文化連盟

参加申込みは8月22日(金)迄に、下記へはがきに住所、氏名を記入して行なうこと。

〒343 越谷市千間台西2-17-16 宮川 進

(問合せ ☎75-9139)